宇津保物語「藤はらの君」巻末の文の処理について

竹原崇雄

本誌国語国文学研究の第五号（石坂正蔵先生還暦記念特集）において、「宇津保物語『藤原の君』巻末の文の処理について」と題して拙論をものしたことがあった。その後読みかえしていくうちに、以前の考えと変ったところが出て来、その部分について、本稿において補訂しておきたい。

一

「藤はらの君」巻末の一文に次の一節がある。便宜上、(A)、(B)の二つの部分に区分して記す。

(A) つごもりばかりになりぬ。東宮よりあて宮の御もとに、かくきこえたまへり。

はつ秋のいろをこそみめ女郎花露のやどりときくがくるしさ

きくことのさまぐなるこそかひなけれ」

ときこえたまへり。

あて宮

秋の色も露をもいさやをみなへし木がくれにのみをくとこそみれ

れいのさい将

旅ねする身には涙もなからなんつねにうきたる心ちのみする

あて宮

たびごとに空にたちゐるちりなれやつゆばかりにもうかぶなる哉

左大将殿より

わび人の涙をひろふ物ならばたもとやたもとのはことならまし

あて宮

なみだをもはこなる玉とみましかばよそなる人をひろひそへまし

中納言殿より

しづみなむ身をばおもはず名とり河ふみみてしがなふちせしるべく

あて宮

滝津せにうかべるあはのいかでかは淵せにしづむ身とはしるべき

兵部卿の宮より

かくばかりうきには恋のなぐさまでつらきさまなげきます哉

(B)

三のみこ、なかのおとゞにて、御ことあそばし、ものがたりし給あひだに、御まへなるところになつむしのいるをみ給て、

ひとりぬる身も夏虫を見ざりせばかくしも恋にもえずぞあらまし

いとゞみなこひしく、いかならん」ときこえ給へど、きゝいれたまはず。侍従の君、

人をおもふ我身の玉はなからなんむなしきからはなげきしもせじ

いらへ給はず。兵衛佐ゆきまさ

かやり火のけぶりもくもとなるものをした草をしもむすばざらめや

御かへしなし。（二〇三頁9行ー二〇六頁5行）注(1)

右に引用した(A)と(B)とを比較してみると、諸先学の所説にあるとおり、(A)は秋の季節を念頭においた表現であり、(B)が夏の季節を背景とした描写となっており、その点、(A)より(B)への物語の流れは、季節の流れに逆行していて、物語の平常の展開に矛盾している。この矛盾を解決する解釈は、早く笹淵友一氏によって次のように指摘されていた。

巻末の「三のみこ中のおとどにて御琴あそばし云々」以下の条は日本文学全書本には「あるいは他からの竄入であろうか」とあり、古典文学大系本も「錯簡か誤脱か」と疑っているが、これは本来行正の歌「山がつのあとなる水も清ければ空ゆく月の影を待つかな」（古典文庫本一九四頁）のあとにあったものであろう。右の歌につづく絵解に「こゝは大将殿。あて宮おはす。侍従の君と御ことあそばす。三の宮御ことあそばす」とあるが、三の宮が琴をひく場面はこれに先立つ本文にない。「三のみこ中のおとゞにて御琴あそばし云々」はこの絵解と一致し、また季節の上でも絵解の前の本文、三のみこ云々以下の本文共に夏であって、一連の本文として矛盾なく調和している。注(2)

右の笹淵氏の所説によって、この巻末の一文は、その落ち着く場所を得て、矛盾は氷解したが、更に今一つの問題が残っていた。それは、笹淵氏の所説に従って、巻末の文を絵解の前に移動したのであったが、次に示すその直前の本文もまた、問題を含み持つ一条なのであった。

(C)

（……とあれど、御返なし。）人〳〵の御かへりきこえ給を、三のみこ、御まへちかきまつのきに、せみのこゑたかく

なくおりに、かくきこえ給。

かしがまし草葉にかゝるむしのねよわれだに物はいはでこそおもへ

すみどころある物だに、かくこそ有けれ。」

あて宮きゝいれ給はず。じゞうの君、御ことあそばすついでに、

人をおもふ心いくらにくだくればおほくしのぶに猶いはるらむ

れいのきゝいれ給はず。ゆきまさ、あこ君にかくきこえたり。

山がつのあとなる水もきよければ空ゆく月の影を待かな

（一九三頁9行―一九四頁7行）

右に引用した文章の冒頭の「人〳〵の御かへりきこえ給を」という一文が、その直前の「御返なし」という表現と矛盾している。そこで、右の一条を、笹淵氏の所説に従って移動させた後の巻末部分に位置させると、この矛盾はまた、氷解する。即ち、巻末の一文、(B)と、いま示した(C)とを、その場所を入れ替えると、すべての矛盾事項はなくなるのである。ただ、(C)の中に「せみのこゑたかく」という表現があって、これは夏の風物であり、(C)を巻末にもっていくと、(A)―(B)と同様に、(A)―(C)の関係もまた、秋から夏へと逆行することになって、この矛盾は解決しないことになるが、「せみ」が「すみどころ」というような表現と結びついている場合は、その蝉は、秋の季節に属するということが、次の例によって認められるのである。

例(1)秋をへてこよひのことは松がえにすごもるせみもしらべてぞなく（「ふきあげの下」五五三頁）

主人公仲忠と吹上に住んでいた源涼とが、「神泉」の「もみぢの賀」において琴の弾きくらべをした際の帝の歌である。この中に詠み込まれている「せみ」は、「秋をへて」とあることによってもわかるように「秋」「なく」「せみ」であることはっきりしている。前の文からも「九月」であることは明確であり、秋も末である。

例(2)秋ふかみ山べにかるゝ松風をめづらしげなくせみやきくらむ（同五五三頁）

この歌の場合は、鳴いている蝉ではなく、「きく」「せみ」である点が、例(1)の場合とは異なっているが、「きく」=「せみ」であるからこそ、逆に「すごもるせみ」の姿がうかびあがってくると言える。

例(3)松風のこゑにくらぶることのねをすなるゝせみはしらべざらめや（「かすがまうで」二六五頁）

例(4)春山の木のねのせみはすをせばみ夏のこのはや恋しかるらん（同二七〇頁）

右の例(3)、例(4)に詠み込まれている「せみ」は「す」に結びついていて「春」のものとなっているが、これは「秋」に巣ごもりして「冬」「春」を経過して「夏」を待つ「せみ」であって、本論中の「せみ」と性格は異なるものではない。

以上の例から、「せみ」が「す」と結びつく場合、その「せ

み」は、秋もしくは秋に近い季節になく蝉だと考えてよい。[注(3)] 従って、(C)の部分は、「せみ」が「すみどころある物」としてとらえられているという点において、季節は秋であると判断し、(B)の夏の描写がなされている巻末の部分と入れ替えたのであった。

以上が、笹淵氏の所説、また、前記拙稿において論じた内容の概略である。

二

ところで、先に挙げた(A)の部分について、今一度、考えてみたい。その冒頭部分を示すと次のとおりである。

つごもりばかりになりぬ。東宮よりあて宮の御もとに、かくきこえたまへり。

はつ秋のいろをこそみめ女郎花露のやどりときくがくるしさ

きくことのさまぐなるこそかひなけれ」

ときこえたまへり。

まず、右に記した「つごもりばかりになりぬ」以下の一節は、従来、諸注すべて、七月の晦日頃と解している。たしかに、この一条の直前の描写は、絵解を間に挟んで、秋に入って間もない七夕の行事が描かれている。「かくて七月七日になりぬ」（一九八頁8行）とあって、東宮、大宮をはじめとして、七夕の和歌が詠まれ、宰相実忠、三の宮、行政の歌が位置し、絵解がきて「かくて、かへり給ぬ」で終っている。これに続いて、「つごもりばかりになりぬ」となっている点から考えると、この「つごもり」は当然七月の「つごもり」としてしか考えられない。しかし、これに続く、東宮とあて宮との贈答歌とを考えてみると、一概にそうとも断定しかねる要素を含み持つことに気づくのである。

この東宮の和歌について諸注は次のように解している。

宮田和一郎氏―私こそあて宮を自分のものにしたいと思ってゐるのに、他人のものになったと聞くのがつらい。[注(4)]

河野多麻氏―初秋の女郎花の新鮮な色を見たいと思っていました。だのにその女郎花には既に露が宿ると聞いて、私の心は苦しくいたんでいます。[注(5)]

原田芳起氏―君を見むと待つに他の男たちが君に物言いかけているときくのが苦しいことだ。[注(6)]

野口元大氏―わたしは色づいたばかりの初花をこそわがものとしたいのです。「色づく秋のなき」などとおっしゃるが、女郎花には実はすでに露がやどっているという噂で、聞くのも苦しいこのごろです。[注(7)]

以上の先学の示された解釈が成立するためには、「はつあきのいろをこそみめ女郎花」の解釈において、「はつあき」を「七月」の「つごもり」ととったのでは、「自分のものにしたいと思ってゐる」「君を見むと待つ」「新鮮な色を見たいと思っていました」「色づいたばかりの初花をこそわがものとしたい」というような東宮の期待する心情は強く浮いて来ない。や

はり、「はつあき」という新しい季節の訪れの中で、美しい女郎花を見たいというま近にせまる期待への感動が「自分のものにしたい」「見たい」「君を見む」「わがものとしたい」と表現されているものに相違ない。そう解釈してこそ「露のやどり」と聞いた時の落胆、苦悩が、歌を贈られる女の心情をうってくるのである。以上の解釈に於て、諸注が成立するためには、「つごもり」はどうしても「六月」でなければならないのである。「七月」の「つごもり」では、「はつあき」の新鮮味は薄れてしまう。更に、「七月」「つごもり」の日は、「はつあき」の季節はすでに終りであり、その終りにあたって、「はつあき」の感懐を歌に託すというのは、季節に敏感な当時の人々の心情を考慮する時、首肯し難い感じがするのである。もちろん、「七月の初めから『初秋』の女郎花を見たいと思っているうちに、いつの間にか『つごもり』になって露が宿っている」（七月の当初よりあなたを自分のものにしたいと思っていたのにいつの間にか、『つごもり』になって、あなたが他の人と結ばれてしまったと聞くのはつらいことです。）というような解釈は成立しない。東宮の心の中に、貴宮への遠慮や、気兼ねや、ためらいがあったとはとうてい思えない。その点、上の句と下の句との間に、一月の日時の流れを認めることはできないのである。

以上のような観点より、ここはやはり、六月の「つごもり」と解釈し、明日にでも「秋立つ日」を控えた期待の心が詠み出した歌として理解したいのである。そうであってこそ、新たなる季節の中の女郎花のように美しいあなたへの慕情が強く出るのであり、「露のやどり」と聞く落胆の心が大きく響いてくるのである。

東宮の歌に続くあて宮の歌は次のようになっている。

あて宮

秋の色も露をもいさやをみなへし木かくれにのみをくとこそみれ

この貴宮の返歌の場合も、「秋の色も露をもいさや」というのは「まだ六月のつごもりで、秋になっているのではありませんから」という調子の詠み方ではないであろうか。七月の晦日であったならば、「いさや」という形で、「秋の色」「露」を否定することはできないのではなかろうかと思われるのである。「木がくれにのみをく」という表現に対しても、まだ夏の影を宿した情景が偲ばれてくるのは、あながち無理な解釈によるものとのみは言えないであろう。

ともあれ、「はつあき」「はじめのあき」という言葉が示す範囲は、七月の上旬が多く、とくに、秋の訪れを待つ人々の心情から、「七月一日」を指す場合が多いということも、以上の解釈を支える大きな要因の一つになるであろう。

以上のように考えてくると、この「つごもりばかりになりぬ」に始まる一段、即ち、前節に於て考察した巻末部分(B)に入る直前の兵部卿の宮の歌までの部分は、その間に切れ目がないことも考えて、「六月の」「つごもり」のことを叙述したものであ

るということになるのである。

そうなると、絵解を挟んで、この部分の直前に位置している「七月七日」（一九八頁8行ー二〇三頁2行）の一条とは、日時の進行において前後逆となり、物語の展開のうえで大きな矛盾が生じてくることになるのである。

三

一節においてすでに述べたように、前節で考察の対象とした「つごもりばかりになりぬ」で始まる(A)の部分の後には、現在では「三のみこ、なかのおとゞにて、御ことあそばし」以下の(B)の部分が続いているが、本来は、(A)の後には、それよりも前に位置している(C)の部分が続いていたものであった。即ち、(A)ー(C)という形態で巻末部分が構成されていると考えてきたのである。ところが、考察してきたように、(A)の位置が、その前の「七月七日」の条と矛盾してくるとなると、その「つごもりばかりになりぬ」の一条の位置について再び考察しなければならなくなってくるのである。

(A)と(C)とはその接続関係においては問題はなく、(A)は六月ではあっても「つごもり」であり、すでに「秋」を間近に控えている季節である点から考えて、(C)との結びつきには問題はない。従って、(A)の位置がきまれば、それと共に、その後に(C)は直接続くということになるのである。

そこで、「七月七日」の条よりも前で、六月の「つごもり」の情景が描かれた場面としてふさわしい位置を考えると、「かくて、七月七日になりぬ。」とあって、東宮がはじめてその姿を物語に見せる場面があるが、この「七月七日」の条の前が、その位置としては考えられるのではなかろうか。現在は、そこのところには、次の記事が位置している。

かくて、そちのぬし、九の君は宮づかへし給べしときゝて、はらだちて、とのもりのざうしにしのびいりて、「かく人のいましむるさ月はいぬ。いまはかのことなし給へ。ものいひきりなすそ。ことはなるたゆましむるはあしきわざなり。……」（一九五頁10行ー一九六頁2行）

右は三奇人の一人滋野真菅の話で、現在(C)が位置しているその後の絵解に続いて記されている。右の文中にあった「さ月はいぬ」というところから判断すると、この真菅の話は六月のこととして設定されているものと考えられる。その点から考慮すると、この真菅の話の後、即ち、真菅の話と「七月七日になりぬ」との間が、その位置としてはもっともふさわしい場所となってくるのである。

この滋野真菅の話は、「藤はらの君」本来の物語を構成する実忠を中心とする求婚者群による貴宮求婚説話とは異質な要素を持っている。これについては、上野の宮、三春高基の話と同様に、中野幸一氏の表現によれば「反貴族的個性の創造」[注(8)]によって、読者の興味をそそるべく、「藤はらの君」を一通り書き終えた後に挿入されたものに相違ないという説が先学諸氏によってなされている。この後記挿入の際に、物語の構成が乱れる

ということは十分考えられることである。「藤はらの君」巻末の一条に関係する本文の乱れも、滋野真菅の話の後記挿入というところに、その要因を求めることができるのではなかろうか。「そちのぬし」（真菅）の話の前後の記事に問題が多いということは、明らかにそのことを示しているものと思われるのである。しかも、この話の位置している部分に、(A)－(C)の記事が入ることを仮定してみると、物語の流れは、前後矛盾することなく、また、異質性、断層を感じさせることなく、季節の中に位置づけられていくのである。こう考えると、(A)－(C)の記事は、真菅の話の後に位置していたものではなく、真菅の話が現在ある位置に、本来は存していたものと推定されてくるのである。

四

以上述べてきたような過程に従って結論を求めていくと、次のようになるのではなかろうか。

即ち、(A)と(C)の部分は、真菅の話の挿入以前は、現在「そちのぬし」の話が位置している部分に、(A)－(C)という連続した形で存していたものと考えられるのである。そして、現在巻末に位置している夏の情景を背景に描写されている「三のみこ、なかのおとゞにて、御ことあそばし」以下の一条が、現在(C)が位置している部分に(C)に替って入ることになる。現在、(C)－（絵解）と(A)－(B)と矛盾し、分離した形で構成されているものが、本来は、(B)－（絵解）－(A)－(C)という矛盾のない構成で、しわも、連続して場面を構成するものであったろうと推定するのである。巻末部分の矛盾する記事は、絵解を介してではあるが、一続きのものとして存していた当初の形態に戻すことができ、「藤はらの君」の巻末部分の原初形態が浮かびあがってくるのである。従って、原初形態に戻した場合における「藤はらの君」の巻末部分は、「七月七日」の七夕の行事の後の絵解に続く、「かくて、かへり給ぬ。」（二〇三頁8行）で終っていたものと推定されてくるのである。

巻末部分の本文の乱れは、単なる錯簡によるところのものではなかった。野口元大氏が「作品の増補作業に関連した事情から派生した錯誤の結果として、このような入れ換わりが生じたのであろう」[注(9)]と述べておられるように、「藤はらの君」が成立していく過程の中で生じたものであった。

注(1)引用は「古典文庫版前田家本宇津保物語」を復刻した「宇津保物語 本文と索引本文編」（笠間書院刊）による。頁数は底本の頁数、記号等は筆者による。以下これに同じ。

(2)笹淵友一氏「宇津保物語の様式」（宇津保物語研究会編「宇津保物語新攷」古典文庫刊）

(3)拙稿「『句題和歌』の成立についての試論－『なく蝉の』の歌をめぐって－」（東北大学文学部国文学研究室編「北住敏夫教授退官記念 日本文芸論叢」笠間書院刊）

(4)宮田和一郎氏「宇津保物語一」（「日本古典全書」朝日新聞社刊）

(5)河野多麻氏「宇津保物語一」（「日本古典文学大系」岩波書店刊）
(6)原田芳起氏「宇津保物語上」（「角川文庫」角川書店刊）
(7)野口元大氏「うつほ物語(一)」（「校注古典叢書」明治書院刊）
(8)中野幸一氏「『うつほ物語』「藤原の君」の巻の原初構想」（「早稲田大学教育学部学術研究」二五号）
「真菅の求婚が上達部や親王たちよりも後のことであり、東宮の求婚よりも遅れている」
「真菅関係の記事は、秋から翌年の五月過ぎまでにわたっていることになり、それが『藤原の君』の巻においては、行政紹介の四月後と七夕の前の二箇所に二分されて挿入された形になっている」
中野氏は更に「『藤はらの君』の構想としては、もっとも後に創造された人物群」と述べておられる。
(9)野口元大氏「うつほ物語の研究」（笠間書院刊）

（熊本女子大学助教授）

追記　中野幸一氏は「『うつほ物語』の脱落資料―『風葉和歌集』所載歌と『花鳥余情』所引の一文をめぐって―」（「早稲田大学教育学部学術研究二十三号」）において、「藤はらの君」巻末の贈答歌群に続くもう一連の和歌群の存在を想定しておられる。

◆寄贈雑誌

説林	愛知県大	二七
淑徳国文	愛知淑徳短大	二〇
国語国文	愛知淑徳大	二
国語国文学報	愛知教育大	三四・三五
短大紀要	跡見学園	一五
国文学科報	跡見学園女子大	七
法文学部論集 ―文学科編―	愛媛大	
愛媛国文研究	愛媛大	二八
愛媛国文と教育	愛媛大	一〇
愛文	愛媛大法文学部	一五
語文	大阪大	三六
医療技術短大研究紀要	大阪大	
女子大文学	大阪女子大	三〇
学大国文	大阪教育大	二二
国語と教育	大阪教育大	八
人文研究	大阪市立大	三〇の一
文学史研究	大阪市立大	一九
論集	大阪樟蔭女子大	一六
樟蔭国文学	大阪樟蔭女子大	一七
国文	お茶の水女子大	五一